
1 2年前は桃、今年は・・・？

平葉陽蘭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

12年前は桃、今年は・・・？

【Nコード】

N6611D

【作者名】

平葉陽蘭

【あらすじ】

一応平×和で和葉ちゃんが主役です。バレンタイン、平次に何をあげようか迷っているうち、12年前の初めて平次のチヨコをあげたバレンタインのことを思い出します。そのときに平次にあげたチヨコを　と言われ・・・原点に戻って　と言われた形のチヨコを作ることにきめた和葉ちゃん。さて今年の平次の反応は、そしてそれに対する和葉ちゃんの気持ちは？

前編：12年前のバレンタイン

「今年のバレンタイン、お父ちゃんはいつものでいいとして平次には何作る……。去年はチョコチップクッキーやったなあ。ほんま迷うわ……。」

2月になり、和葉は悩んでいた。バレンタインには毎年、平次にチョコだとかクッキーだとかをあげているのだが、「何を作ろうかと。」

「去年はクッキーやったから今年は“原点”に戻ってチョコ作るかな。でもチョコっていても色々あるし……。そうや！！ほんまの“原点”に戻ってあの形にしよう。普通のチョコやったらおもんじゃないからナッツとか入れよっ。」

ほんまの“原点”とはいったいなんなのだろうか。

12年前

「おとうちゃん、テレビでゆっててんけどな、バレンタインデーってなに？」

「バレンタインデーっていうのはな、女の人が好きな男の人にチョコとかをあげる日の事やねんで。」

和葉は5歳にしてバレンタインデーを知った。

「かずはもちョコあげたい！」

「そうか・・・チョコを買うのについて行ってやりたいんやけど、お父ちゃん忙しいんや・・・。そやから近所に住んでるおばあちゃんに頼んであげよう。そうや和葉、自分のお金で買ってみたいんか？お正月にお年玉もらったやろ？」

「うん、おとしだまでかう。」

「じゃあ、ある程度おばあちゃんに渡しとくぞ。」

数日後、和葉は祖母と近くのスーパーへチョコを買いに行った。

「おばあちゃん、おかねどんだけあんの？」

「千円あるよ。これ以内に収めるようにしような。（和葉があげるんはたぶんあの子。そやのにこの金額・・・たぶん自分の分を期待してるんやろうな）」

「かずは、このチョコがいいー！」

と和葉が指差したのは、いちご味で小さなハート型のチョコが詰まった透明ケースのものだった。値段は450円。

「おばあちゃん、これ、もうーこかえる？」

「買えるよ。」

「じゃあ、もうー」。へいじとおとうちゃんにあげんねん。」

12年前のバレンタイン当日

「へいじ、これあげる。」

「なんやねん、それ。」

「きょうはバレンタインデーっていつておんなのがおとこのこにチョコをあげるひやねんて。」

「それでオレにくれたんか？ありがとうな、かずは。」

この時和葉は思ってもいなかった。あげたチョコを　と言われることを。

翌日

「へいじ、きのうのチョコおいしかった？」

自分の選んだチョコなんだからおいしかったに決まってるど、「おいしかった」という答えを期待して言った和葉に対し、平次は・・・

「ああ、メツチャおいしかったで。“もも”のかたちしてんのがめずらしいな。」

「ももちゃうもん、ハートやもん。なんなん、せつかくかずはがえらんでかったのに。へいじなんか“もうしらんっ！”」

そう言うと和葉はくるりと振り向き、平次の下から去っていった。
足音を立てて……

「か、かずは……。」

5歳の平次は何も言えず、ただ呆然と立ちつくすしかなかった。

中編・認めたくないこと

「ほんまあん時の平次には腹立ったわ。今回もそんなこと言ったらタダじゃ済まさへん。」

日曜日、和葉は材料と道具を買いに出かけた。チヨコに使う型を探している……

「和葉っ！」

向こうからクラスで仲のいい陽子がやってきた。手にはチヨコらしきものが入っている。和葉はそれを見て……

「陽子ちゃん、それサッカー部の新あらいぐち口くんあらいぐちにあげるんやろ？」
和葉が当たり前のように言う。

「和葉こそ、服部君のやろ？」

こちらもまた当たり前のように言う。

「そうやけど、幼馴染やからあげてるだけで陽子ちゃんとはちゃうよ。」

口ではそう言うが実際はそうじゃないということが和葉の顔を見ればよくわかる。だから陽子は……

「服部君もそうやけど、和葉もいい加減“卒業”して私らみたいになっただら？」

「だからそんなんちゃうって言うてるやん……。まあ、お互いにおいしいの作るうな。アタシはクラスのみんなにクッキー作って配ろうと思ってるねん。陽子ちゃんは？」

和葉は平次とのそういう関係を否定するが、和葉がそう思っていない

いだけで周りから見ればそつなのである。

「私も何か作るうと思つてんで。つて話そらしなや。まあ頑張るな
じゃ。」

バレンタイン前日

クラブから帰つてきてばんごはんを食べた和葉はチヨコとクッキー
を作り始めた。

平次と父にあげるチヨコはラッピングをし、クラスのみんなに配る
分は大きなたっぱに入れた。

そして、

・明日クラブ終わつたら校門で待つとつて。・

と平次にメールした。その顔は傍はたから見ると、付き合っているよう
にしか見えない。和葉が強く否定しているのは、平次とは幼馴染で
“カップル”という感覚がわからないだけであるう。

しばらくして、

・わかつた。そつちが先に終わつたらちゃんと待つとけよ。・

と返事がきた。

バレンタイン当日

教室がいつもより騒がしい。女子が友達同士でチョコなどをあげ合っている。いわゆる友チョコだろうか。本命らしきものをあげる女子が見える。でもこの2人のことはクラスのみんなが知っている、和葉と平次のように。だがこの2人の関係がクローズアップされることというのはまずない。あの2人がいるから……。

教室に入った平次はこの雰囲気圧倒されたが、少し嬉しそうにも見えた。

平次が自分の席に座ると……

「服部君、これ家で作ってきてんけどあげる。クラスのみんなに配ってるねん。」

と数名の女子がやってきた。

「オレにくれんのか？ありがとうな。」

その女子から少し遅れて和葉もやってきた。

「平次、クラスのみんなに配ってるんやけど、よかったからこれも”食べへん？”

「ああもらうで、ありがとうな。でも、“これも”ってどういふとや？」

平次はどういうことかわかっていたが、あえて聞いてみた。

「えっ、そんなん言^ゆってへんよ。聞き違いちゃう？」

と言ったが本当は言っていた。自分では認めているが、平次の前では認めたくなかったのだ。

中編：認めたくないこと（後書き）

お久しぶりです、平葉陽蘭です。「元気がない哀へ・・・」も全然更新していません。もうすぐ半年たちますよね・・・。わかっているんです。1回ここまで空くとなかなか思い浮かばなくて・・・。オチは決まってるんですけど・・・出来るだけ頑張って早く完結させたいと思います。

そんな中思いついたこの話。バレンタインの話を書いてみたいと思っただけじゃあ平×和にがいいなあと思いきやこんな話になりました。本当は短編にするつもりだったのですが、当日までに完成しなく、連載という形にさせていただきました。

一応、次回でこの話は完結です。

後編 1：この日くらいは・・・

「ありがとうございます」

練習を終えた平次たちが更衣室で制服に着替えて外に出ると、女子部員たちが待っていた。

「私たちからのバレンタインのプレゼント。」

女子の部長が代表して言った。女子部員たちの手には平次たちに配るチョコやクッキーがあった。

「おおっ！！」

男子部員たちは皆、歓声をあげた。そして皆、お礼を言った。

「じゃあまた明日。」

剣道部員たちはそれぞれ校門に向かった。校門にいる女子生徒の姿を発見した平次は、一緒に帰ろうとしていた男子に・・・

「トイレ行きたなったから先帰っといってくれへんか？」

校門に立っているのが和葉だと気づき、このままじゃ冷やかされるのは目に見えている。せめて“この日”くらいは・・・と思った平次はみんなより遅れて帰ろうとしたのだ。

「それくらい待つとい・・・」

「服部がそない言ってるんやから、みんな帰ろうぜ。」

みんなで待つていようと言う同級生の言葉を遮り、副部長で平次と仲の良い男子がそう言った。そして平次の方を向き、「まかしとけ」と言ったような感じで平次を見た。平次は「何やねん？」とあまり

いい感じはしなかったが、それでもわかる。心のどこかでは歓迎していることを。

平次を待っている和葉は、こっちにやってくる剣道部員たちの中に平次の姿が見当たらないので「なんでやる？」と思ったが、待っている理由が理由だったので聞けなかった。男子部員たちは和葉が校門で待っているのを見て、「ああそういうことか」というような顔をしたので和葉は不思議に思った。そして剣道部の副部長の男子が和葉の方を向いて軽くウインクしたからなおさらだ。

「なんなん？あの顔とウインクは。意味わからんねんけど。平次も何してんの？クラブは終わってんのに。」

剣道部員たちが去ると、見計らったかのように平次がやってきた。

「待たせたな、和葉。」

と平次が言った。こう言ったのは和葉がなんとなく不機嫌そうな顔をしていたからだ。だからそういう態度だけは取っておこうと思っただのだ。だが、そっちが早ければ待っててくれとメールしたはずなのだ。平次は和葉が不機嫌な理由がわからないようだ。

「もう、何しとったん？他の剣道部の子らはもう帰って………
しもてんで。」

「ん？どうないしたんや？」

「うっん、なんでもない。くしゃみが出そうになっただけやで。」
もちろんこれは嘘だ。和葉が言葉に詰まったのは、平次が他の剣道部員達より遅れてやってきた理由がわかったような気がしたからだ。

それは自分と同じなのだ。こういうところを平次も和葉もクラスメイトたちに見られたくないのだ。

「じゃあ行こか、平次。」

「ああ。」

あの副部長のおかげか、剣道部員たちは結構前を行っているようだ。後は誰にも会わなければいいのだが。幸いなことに今、前後には誰もいない。今のうちに・・・

平次と和葉は駅へと向かって歩き始めた。和葉は軽く深呼吸すると再び口を開いた。

後編 1…この日くらいは……（後書き）

皆様お久しぶりです、平葉陽蘭です。

本当は3話で終わる予定でした。ですが、書いていたら長くなってしまい、文字数的には次の分も3話目に載せてしまってもよかったです。ですが、それまでの分と文字数を出来るだけ合わせておきたくて……最終話はすでに完成していますので、明日にでも投稿する予定です。これが終わったら本当に「元気がない哀へ……」の執筆を頑張らないと……オチは出来るというのに……。

後編 2：気持ちの変化

「平次、これアタシからのバレンタインのプレゼント。」

「おお、毎年ありがとうな。」

と平次は和葉に礼を言うとプレゼントを入れるためカバンを開けた。すると・・・

「えらいよーけもろたんやね。」

と平次のカバンに入っているバレンタインのプレゼントらしき物を見つけて和葉はそう言った。

「ああ、これか？剣道部の女子にもろたんや。オレ以外の男子部員ももろてたで。」

平次と和葉の仲というのは結構有名なので平次だけにあげる女子とというのはそっけない。

「なあ平次、ちよつとでもええから今食べてみてくれへん？」

「・・・別に構^{かま}へんけど・・・。今年のはよっぽど上手いこと出来たんか？」

本当はすぐに食べてほしいのではなく、すぐに見てほしかったのだ。平次が何と言うか早く知りたくて・・・

平次が綺麗にラッピングされたプレゼントを開けるのを、今までにないドキドキ感で和葉は見ていた。それと同時に和葉は小さな違和感も覚えた。平次がとても丁寧に開けているのである。包装紙を出るだけ破らぬように、リボンもちゃんとほどいて・・・。今まであげたその場で開けることを要求するとはなかった。だから平次がどのように開けているかなんて和葉は知らない。だが、いつも平次といるからわかる。平次には悪いが、平次はそういう性格ではない。

「おお、今年のんは中に何か入ったチョコか。じゃあ早速食べんで。」

平次はその中のひとつを手に取り、口にした。

「おつ、うまいやんか。中に入ってるのはナッツ系か？」

「そうやで。おいしかったんやったらよかったわ。」

「そん……。」

と和葉が何か言おうとしたが、平次の方が早かった。

「それにこれ、懐かしいわ。昔のこと思い出してもた。」

「昔のこと？（ひよつとして……）」

「ああ、初めて和葉にチョコもろた時のことや。あん時以来やな、和葉に“桃型”のチョコもろたんわ。ほんまに懐かしいわ。」

「なんなん？折角作ったもんを桃型やて！？それに平次、あん時のこと覚えて……へんの？……でももうええわ……。」

「か、和葉……？」

（覚えてへんわけないやろ……でもわからんわ……。）

平次はあの時のことを忘れてはいなかった。あの言葉は5歳の平次には強烈過ぎたからだ。覚えていたからこそ言ったのだ。いつもの調子で。でも、和葉はいつもの和葉ではなかった。いつもなら普通に言い返してくるのに、今日は違った……。平次にはそうする理由がわからない。

「どないしたんや、和葉？オマエがそんなんやったら調子狂つわ。どっか悪いんか？」

多分違うと思いながらも平次は一応聞いてみた。

「そんなことないで、気にしやんといて。」

調子が悪いから言うのをためらったのではない。なんとなく心当たりはある。だが、それを和葉は認めたくなかった。だからああ言うしかなかったのだ。平次があれで納得するとは思わなかったが・・・

その後、平次はそのことに一切触れずに和葉と普通に話して帰った。和葉も平次の配慮に感謝し、何もなかったように平次と話していた。平次と話していて和葉は気づいた。“やっぱり認めなくてはいけないのでは？”と。

「じゃあまた明日な、和葉。今日はありがとうな。」

「うんまた明日な、平次。チョコはアタシ以外にもよーけもろたんやから一気に食べたらあかんよ。」

「そんなんわかつとるわ。」

平次が和葉より1つ手前の駅で降り、その帰り道、和葉は・・・

「あん時はホンマに腹立ったわ。そやけど今回は……。確かに腹立ったには違いないけど昔ほどやない……。アタシが大人になったっていうんもあるかもしれんけど、そやなくってやつぱりアタシ平次のこと……。ってアタシ何考えてんねんやろ。」

やつぱり和葉にはまだ早いのだろうか。でも今回のことで和葉の平次に対する何かが変わったのは確かである。

後編2：気持ちの変化（後書き）

「12年前は桃、今年は・・・？」完結いたしました。話が頭に浮かんでから約1カ月半……。これで3回目くらいですけど、バレンタインの日に短編で投稿するつもりの話でした。でも書き切れなくて……。それで思い切って連載にしました。でもそれでよかったと思います。あのまま短編で投稿していたら終わりがいい加減な作品になっていたと思います。タイトルもそのまま……。ですよ。もうちょっと凝ったタイトルにしたかったですけど、思いつかなくて……。

それでは次回は「元気のない哀へ……」FILE11でお会いしましょう。（たぶん）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6611d/>

12年前は桃、今年は・・・？

2010年10月15日19時24分発行